

市民力をまちづくりに活かすための対話の場の在り方 ～「わがまちのしゃべり場」開催の意義と展望から～

愛知県刈谷市 北洞 貴康



1 はじめに

人々の価値観が多様化していくなか、自治会等の地縁型団体への加入者の減少や地域活動への参加減少、役員等の担い手不足等によって、地域の共助力が相対的に低下しつつある。また、法的制度を前提とする行政サービスも、複雑化する市民ニーズに効果的に対応することが難しくなっている。一方で、NPO 法人や市民活動団体等のテーマ型団体の増加に見られるように、市民の自発的な動きも徐々に増えつつある。

このような社会環境のなか、刈谷市では、市民一人ひとりが主体的に様々な形でまちづくりに貢献することを目指して「刈谷市共存・協働のまちづくり推進基本方針」を策定した。そして、市民同士がまちへの想い・期待・課題を語り合う対話の場「わがまちのしゃべり場（以下「しゃべり場」という。）」を開催し、市民のまちづくりに対する主体性の高揚を図ってきた。

本レポートでは、このしゃべり場の取組について、参加者への聞き取り調査等を通して考察し、市民の意識の変化について明らかにするとともに、しゃべり場の今後の展望を見据えた上で、市民力をまちづくりに活かすための対話の場の在り方を提言する。

2 しゃべり場のあらまし

(1) しゃべり場とは

わがまちのしゃべり場とは、市民が刈谷のまちの課題を自分ごととして捉え、できることから行動していくことの第一歩として、お互いの立場を尊重しながら、自らのまちへの想いを語り合い、聞き合う対話の場である。平成 20 年から年 1 回、市の主催により刈谷市民ボランティア活動センター等市内中心部で開催しており、平成 25 年度までで 6 回開催している。



写真 1 わがまちのしゃべり場（平成 25 年）

これまでの延べ参加者数は 484 人。開始当初は 100 人規模の参加があったが、徐々に参加者数は減少しており、ここ 3 回の平均参加者数は 65.7 人である。参加募集は市の広報やホームページを中心に、市内の NPO 法人への訪問活動や参加者による口コミ等、対面による地道な PR 活動を重視して行ってきた。参加年代層は 50～60 歳代が多いが、学生等 20 歳代からの参加も見受けられる。参加者は市民活動の実践者が多数を占めるものの、友人に誘われて参加したという市民活動未経験者の参加実績もあり、わずかだが行政職員の参加も見られる。終了後のアンケートによると、いずれの回においても、ほとんどの参加者が語り合いによって満足したと回答している。

(2) 誕生の経緯

刈谷市では、平成19年10月から平成21年2月までの約1年半の期間をかけ、今後のまちづくりは、市民をまちづくりの主役と捉え、必要なことは、市民自らが、様々な人や組織と協力し合いながら行動していくまちを目指す「刈谷市共存・協働のまちづくり推進基本方針（以下「基本方針」という。）」を策定した。策定に当たっては、本市のまちづくりに関わる地縁団体や市民活動団体等の代表者を中心に委員を構成した「市民との共存・協働推進検討委員会」と、その委員会で検討する方針が、市民の声を反映した内容となるよう、公募で選ばれた市民で構成した「市民ワーキング会議」という2つの組織を設置し、市民の協働に対する想いや考えが内容に活かされるように進めていった。

市民ワーキング会議は、「刈谷市がもっとよくなるために、一緒に考えたい」という気持ちを持っている人を参加条件にして、団体の所属の有無、ボランティア活動経験の有無を問わず募集した。会議は年度単位で一区切りとし、平成19年度は協働の理念の明確化や基本的な考えを整理しながら、理想のまちづくりについて話し合う「思い編」を全4回、平成20年度は、理想のまちづくりに向け、どのような組織や制度や仕組みが必要か具体的に検討する「エンジン編」を全5回開催し、延べ45人の市民が意見を交わした。

しゃべり場の誕生のきっかけは、平成20年3月1日に開催された市民ワーキング会議・思い編第5回会議の場で起こった。当初、平成19年度にある程度まとまってきた基本方針の内容を市民に広く啓発する場として、学識経験者による講演会を計画していた事務局の生活安全課（当時）が「どのようにしたら多くの人たちが参加してくれるか」と参加者に尋ねたところ、講演会を開催するよりも、市民ワーキング会議の延長として、市民自身が自由に想いを語り合えたほうがよいのではという声があがった。これを受け事務局は市民ワーキング会議参加者の中から有志を募って企画ミーティングを立ち上げ、4回の打合せを経て、平成20年6月1日、井戸端会議のように自由に語り合う市民フォーラム「わがまちのしゃべり場」が、123人もの参加者・関係者を集めて開催された。



写真2 第1回しゃべり場（平成20年）

(3) しゃべり場の企画形式

しゃべり場は、開催までに毎回企画会議を行い、現状に最適な企画を検討しているが、手法としては、第1回を除き、ホールシステム・アプローチを採用している。ホールシステム・アプローチとは、できるだけ多くの関係者が集まって、自分たちの課題や目指したい未来等について話し合う大規模な会話の手法の総称であり、しゃべり場では、その代表的な手法であるワールド・カフェ（カフェのようにリラックスできる環境のなかで、テーマに集中した話し合いを重ねていく手法）やオープンスペース・テクノロジー（関係者を一堂に集めて、参加者が解決したい課題や議論したい課題を自ら提案しミーティングを進める手法）をベースに企画を組み立て、「おしゃべりカフェ」と称して実施している。参加者は複数あるおしゃべりテーマの

中から参加するテーマを選び、テーブルに移動して一定時間語り合い、その後席替えを行って新たなテーマで再び語り合う。これにより、市民の様々な想いに触れることができる仕組みとなっている。

また、しゃべり場は「聴く姿勢」を重要視している。対話において重要な信頼関係を築くため、「ていねいに聴く」「心で聴く」「心で感じたことを素直に返す」という心構えを事前に伝え、語り合いのウォーミングアップを行うなどして、雑談や議論とならないよう配慮している。

(4) 市民協働による企画運営

しゃべり場の開催は、事務局である行政とまちづくりを専門とする NPO 法人のほか、有志市民が加わって企画を検討している。毎回事務局からしゃべり場参加経験者を中心に協力を募り、開催半年前ほどからじっくりと時間をかけて想いを語り合い、企画を練り上げている。また運営についても協働で行っており、平成 25 年からは、これまで専門職に依頼していたしゃべり場全体のファシリテーターを市民自身が担うようにまで成長を遂げている。

(5) しゃべり場での語り合いから生まれた市民の動き

しゃべり場での語り合いがきっかけとなり、実際に市民が行動を起こした事例としては、「障害者・高齢者・子ども等いろいろな人が集まるイベントをやりたい」と語った車いす障害者に対し、同席していた地域住民が声をかけたことがきっかけで、市中央部を練り歩く伝統行事への参加が実現したという事例のほか、一般参加の市民が NPO 法人代表と語り合っただけで、同法人の理事となって活動を支えているという事例等が挙げられる。

しゃべり場での対話をきっかけとなり、実際に団体が立ち上がり、活動が始まった事例もある。「刈谷のまちをよくし隊」という団体は、沖縄地方で行われている語り合い「ゆんたく」のように、日常で起こったことや気づいたこと、今後の予定に向けた決意等を、お互いの想いを認め合いながら語り合う活動を行っている。また、「みんなが気楽に集える『たまり場』『おしゃべりカフェ』を作りたい」というつぶやきから派生して、「知られざる刈谷の魅力をみつけよう」をコンセプトに誕生した団体「刈谷おもしろ研究所」は、刈谷市出身の童話作家の朗読会を体験したり、刈谷ことばかるた大会を開催して地元文化に触れる等、身近な刈谷を感じる活動を展開している。

3 しゃべり場が市民に与えた影響と開催の意義

6 回のしゃべり場開催を積み重ねたことによる市民への影響について、市内の市民活動団体へのアンケート、これまでのしゃべり場の参加者へのヒアリング、平成 26 年度開催のしゃべり場企画ミーティングでの意見交換を通して考察する。

(1) 市民活動団体アンケートからみえてきたもの

平成 26 年 6 月～7 月に実施した基本方針の成果・課題を把握するための市民活動団体アンケートによると、30%の団体がしゃべり場に参加経験があると回答した。また参加経験がある団体のうち 76%の団体がまた参加したいと回答している。一方、参加したことがないと回答した

49%の団体のうち今後参加してみたいと回答があったのは 32%であった。参加したことでの効果については「新たな気づきが多く得られた」「仲間作りができた」「他団体との事業連携につながった」といった回答を得ることができた。

参加者にとってしゃべり場は魅力的な場で

あり、継続して参加を望む傾向にある一方、まだ参加したことがない人にとっては、その効果が伝わりにくく、参加意向を示すまでには至っていないことがわかった。

(2) ヒアリングからみえてきたもの

平成 26 年 11 月 23 日に刈谷市民ボランティア活動センターにおいて開催された市民活動団体同士の交流会にて、会場に訪れていた過去のしゃべり場参加者 10 人に対し、しゃべり場とはどういう場なのか、ヒアリング調査を行った。

傾向として「素直な気持ちで語り合いができる」「偶然出会った人から、その人にとっての大切なことを聞くことができる」「生きた情報を交換することができる」といった語り合いの場と回答する人が多かった。

また語り合いを行ったことによって、新たな気づきや視点、つながりを得ることができたり、まちづくりに関わるきっかけを得ることができるという回答が得られたほか「市民であることを自覚でき、愛着を持つきっかけとなる場」という回答もみられた。しゃべり場は、様々な出会いが生まれる場であり、個人として素直な気持ちで語り合いができる場という認識が持たれていることがわかった。そしてしゃべり場の参加によって、自らの活動が発展したり新たな連携を築く等の好循環をもたらせていることがわかった。また活動を始めていない人にとっても、有意義な気づきを得ることができる場であることも見出すことができた。

(3) 企画ミーティングからみえてきたもの

今回、しゃべり場を考察するにあたり、自分ごととしてしゃべり場に関わっていくことで、

現状	回答率	将来	回答率
参加したことがある	30%	今後も参加したい	76%
		今後は参加しない	3%
		無回答	21%
参加したことがない	49%	今後は参加したい	32%
		今後も参加しない	49%
		無回答	19%
無回答	21%	今後は参加したい	20%
		今後は参加しない	0%
		無回答	80%

○有効回答団体数=96団体

表 1 しゃべり場の参加度と今後の意向

出典：2014 年「『刈谷市共存・協働のまちづくり推進基本方針』の成果・課題を把握するための市民活動団体アンケート結果より（刈谷市市民協働課）」

回答	件数
素直に想いを語ることができる場	4
多様な情報や想いを交換ができる場	3
新たなつながりが生まれる場	3
視野の拡大につながる場	2
新たな気づきを得ることができる場	2
まちづくりにかかわるきっかけの場	2
刈谷市民であることを自覚できる場	1
活動の振り返りができる場	1

表 2 しゃべり場とはどういう場なのか

(2014 年 11 月 ヒアリング調査結果により 筆者作成)

企画に関わっている市民の当事者意識を感じ取ることができるのではないかと考えた。そこで、平成 26 年度開催のしゃべり場企画ミーティングに一市民として参加し、各しゃべり場当日までの過程を体感することで、企画運営に関わっている市民がしゃべり場に対してどのような想いでいるのか、意見交換等を通じて考察した。

企画会議では、しゃべり場をどのような場にしたいか、メンバー間で意見交換が行われた。その結果、しゃべり場とは、人と



写真3 しゃべり場企画ミーティング(平成26年)

出会い、自らの想いをゆるやかな雰囲気でも語り合い、聞き合うなかで、「様々な話を聞くことで話題が広がり、新たな気づきを得ることができる場」「自分の想いをみんなの想いへと変えていくことができる場」「自分で何ができるかを考えるきっかけとなる場」「まちづくりの現場で必要となる語り合いの経験を積むことができる場」等、まちへの想いや課題を自分ごととして捉えていく市民同士の気づきあいの場としての位置づけが共有された。

また、事務局によるコーディネートのもとで行われる企画会議では、メンバー同士による活発な意見交換が行われており、よりよいしゃべり場を作り上げていこうとする姿勢を感じ取ることができた。企画会議への参加は事務局や他メンバーからの勧誘がきっかけという流れはこれまでと変わらないものの、会議に参加している市民の意識は高く、しゃべり場という場づくりにおいても、「自分ごと意識」が芽生えているのだと感じた。

(4) しゃべり場を開催する意義

しゃべり場での語り合いによって、相手に想いが伝播していくとともに、自身にとっても、想いを受け入れてくれたという安心感を得ることができ、これまでの取組を振り返ることにつながっている。語り合いによって、自らの活動に新たな気づき生まれ、視野が広がり、その結果対象者の拡大や新たな取組、効果的な連携が生まれている。しゃべり場企画会議においても、回を重ねるたびに、主体的に会議に参加するようになっている。しゃべり場は、関わる市民の「自分ごと意識」を高め、共感を生み出し、自発性を育む効果があり、それにともなってゆるやかな創発を生み出していることを見出すことができた。

またしゃべり場は、市内のまちの出来事を中心に語り合いが行われているため、結果として刈谷市民という自覚や愛着を生み出すことにもつながっていることがみえてきた。ヒアリングや企画会議で関わった人に尋ねてみると、しゃべり場のような、ゆるやかで、多世代が集まり、多様なテーマで語り合うことができる場は、市内には他に存在しないという。また、行政主催だからこそ公平性や中立性が担保され、自由に自らの想いを語るということができるといった意見も聞くことができた。

ゆるやかな雰囲気でもまちへの想いを語り合い、聞き合うしゃべり場という対話の場は、市民主体のまちづくりを目指す上で有効な取組であることがわかってきた。

4 シャベリ場の今後の展望を提言する

シャベリ場の取組を振り返り、その効果について調査したことで、徐々にではあるが市民の主体性が高まり、市民同士の連携も深まっていることがわかった。その一方で、今後シャベリ場を継続していくためには、2つの課題について検討していく必要があることも見えてきた。

1つ目は「体験人数の増加」である。先に紹介した市民活動団体アンケートにおいてもわかるように、シャベリ場は体験者にとっては満足度が高く、その効果もヒアリング等で明らかになったが、その効果は参加することで初めて生まれるものである。図1の市民意識調査の結果からみても、ボランティア活動に対する参加意向は高い。潜在的な市民活動実践者はまだ多く眠っており、これらの市民層がシャベリ場に参加することで、また新たな気づきを得ることが期待できる。いかにして多くの市民が対話の場を体験していくか、様々なアプローチを検討していく必要がある。

2つ目は「活動への進展の促進」である。ヒアリングを中心とした調査結果をみても、自らが活動しているテーマについては、新たな気づきやつながりを反映することができ、シャベリ場での語り合いを活かすことができていた。しかし、これまでにあまり関わったことがなかったり、実際に活動したことがないテーマについては、ともすれば言いっぱなしで終わってしまうこともありうる。また、一人ひとりで実践することができる活動の提言であったとしても、活動したという結果を共有することができなければ、対話の場での成果と覚えることが難しい。行動に結びつき、まちがよい方向へ変わっていくという実感を得ることができるからこそ、対話の場への継続参加が期待でき、さらに行動に移していくという流れが生まれるのではないかと考える。

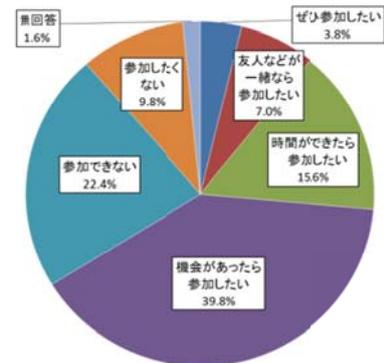
図2の市民意識調査から、約40%もの市民が、地域の課題を自分たちで解決していきたいと考えていることがわかる。この意識を上手く熟成させていくことができれば、新たな活動が生まれ、満足度も高まっていくのではないだろうか。これら2つの課題について、今後取り組むべき方策を提言する。

(1) 体験人数の増加に向けた提言

ア 対象者を絞ったシャベリ場を開催する

平成26年度の新たな試みとして8月に開催した、市北部の地域住民を主な対象とした対話の場「わがまちのシャベリ場・北部編」の結果をみても、参加者39人のうち半数以上の

問：あなたは、今後ボランティア活動に参加したいと思いますか

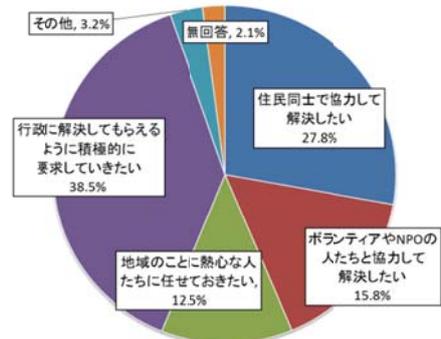


(平成25年調査 有効回答数959)

図1 ボランティア活動への参加意向

出典：地域福祉に関する市民意識調査結果報告書
(平成26年3月 刈谷市・刈谷市社会福祉協議会)

問：あなたは、住んでいる地域で困っていることや問題になっていることをどのような方法で解決するのがよいと思いますか



(平成25年調査 有効回答数959)

図2 地域の課題の解決方法

出典：地域福祉に関する市民意識調査結果報告書
(平成26年3月 刈谷市・刈谷市社会福祉協議会)

人が初参加だったことがわかった。またおしゃべりテーマも地域ならではのテーマで語り合いが行われることによって、地域資源の魅力を考えるきっかけとなったという感想を持った人が多くみられた。現在の市内全域・全世代を対象にしたしゃべり場に加え、他地域での展開や、高校生・大学生中心のしゃべり場、40歳以下限定といった年代ごとのしゃべり場等、対象者が自分ごととしてしゃべり場に参加するきっかけを作ることで、さらに多様な市民が対話の場を経験することができ、行動へ踏み出す新たな気づきを得ることができるのではないかと考える。

イ 他のイベントとしゃべり場とを連動し、参加の敷居を低くする

前出のしゃべり場・北部編では、しゃべり場の開催に合わせ、当日午前にもち歩きイベント「北部まち歩き」を開催することで、参加者同士の交流やその後の語り合いでの話題共有につなげることができた。このように、他のイベントとしゃべり場とを連動することによって、ゆるやかに対話の場への参加を促すことができるのではないかと考える。

愛知県高浜市にて、日本福祉大学高浜市まちづくり研究センターの企画運営により開催されている対話・交流の場「ざっくばらんなカフェ」は、様々なテーマに興味のある市民が立場を超えて集まって話題提供に聞き入り、その後の意見交換で対話し交流することで、新たな気づきやつながりを生み出す場となっているという。また、新潟県長岡市で開催されている市民交流会「のも一れ!長岡」は、まちづくりの取組を聞く「トークセッション」と酒類を含めた軽食を用意した「オープン交流会」の2部構成



写真4 北部まち歩き（平成26年）



写真5 のも一れ!長岡（平成26年）

で開かれており、毎回多世代が集って交流を楽しんでいる。参加者からは「知らない人との出会いがあり楽しんで交流できた」「旧友との久々の再会を楽しんだ」「知人の紹介が芋づる式に続き、ネットワークを広げることができる」等の感想を聞くことができ、飲食を通してのゆるやかな交流が、今後の活動につながるつながりを生み出す場として大きな役割を果たしていると感じた。

実際にしゃべり場においても、平成26年には、日進市で農と自然体験の魅力発信を手がけるNPO法人代表を話題提供者に招いたことで、新たな参加者を生み出すことができた。現在刈谷市民ボランティア活動センターで開催している「車座集会」では、市民活動に精通したゲストを招いて講話を聴いているが、講話終了後に参加者同士の対話の機会を設けることにより、自らが語ることが促されれば、参加者が自分ごととして主体的に関わり、つながりを生み出す場を作ることができるのではないかと考える。

しゃべり場という名称を知らない市民にとっては、どうしても何かきちんとしたことをしゃべらなさいといけなさいという観念に陥ってしまいがちだが、このように他の取組と連動していくことで、対話の場への参加を促すことができるのではないかと考える。

(2) 活動への進展を高めていくための提言

ア 振り返りの場をつくる、現場に行き感じる

これまでのしゃべり場を振り返ってみると、平成23年と平成24年のしゃべり場の後日に開催された振り返りの場「芽吹きをつどい」において、語り合いの内容が熟成され、行動に結びついていることが確認できた。時間をおいて再び語り合うことで、気づきが定着化し、参加者同士のつながりも深まり、今後の行動に結びつくことが期待できる。またしゃべり場で語り合った内容について、実際に現場に行き、体感することで、想いが具体化され、より現実的に活動への一歩を考えることもありうるのではないか。おしゃべりテーマで共感し合った参加者同士でグループを作る等して、刈谷のまちへ赴いていく動きを誘発していければと考える。

イ 小さな社会実験を行う

しゃべり場から新たな活動がなかなか生まれないのは、しゃべり場の参加者の多くが市民活動実践者であり、すでに自ら活動をしている人が多いため、なかなか新たな活動にまで関わるのが難しいということも一因だと考える。しかし、多くの人が関わり、一人ひとりの役割を細かくし、活動期間を限定したプロジェクトであればどうだろうか。しゃべり場の中には刈谷のまちをよくしていくために何か役に立ちたいと思っている人も多く存在する。しゃべり場の語り合いのなかでの興味深いアイデアの実現に向けて、期間限定のプロジェクトを立ち上げる。参加者を募って実践し、その実績について広く共有することで、まちへ貢献したという達成感が生まれ、その結果、次なる活動へ向かう活力が芽生えてくるのではないか。

ウ ファシリテートの力を高める

しゃべり場は、これまでの積み重ねにより、企画の大枠については固まってきているものの、進行方法等については、行政・NPO法人・有志市民が一緒になり、試行錯誤を繰り返してきた。今後、しゃべり場から新たな市民活動が生まれていくためには、場を盛り上げていくよう進行内容を作り込んでいくとともに、その場に応じた適切な問いを立てる等、運営におけるファシリテート能力も問われてきていると感じる。企画運営を担う有志市民を対象に研修等を実施することで、強制的でないゆるやかな活動の芽吹きを生み出す場を作っていければと考える。

5 市民力の拡大による市民と行政との新たな関係

刈谷市では、これまでしゃべり場を市民の人材育成の機会と位置づけ、しゃべり場での対話を通じて、他人との考えの違いを認め合い、相互に協力する力を育むことにより、市民の市民活動への関わり度合を、「関心がある」から「活動へ参加する」へ、「自らの活動を実施する」から「他の活動と連携する」へと、ゆるやかに引き上げてきた。その結果、市内のNPO法人や市民活動団体は増加し、これまでにみられなかった連携事例も見受けられるようになっており、市民力は着実に拡大してきている。この拡大の動きは、今後もしゃべり場を継続することで推し進めていく必要があるが、その一方で、充実してきた市民力と行政の力とを組み合わせ、協働して市民ニーズに対応していくことも考えていく時期に来ているのではないか。

市民主体のまちづくりを推進するべく平成20年9月に創設された「京都市未来まちづくり100人委員会」において、「市民の景観チーム」として活動を始めた委員の一人は、任期中に放置自転車撤去看板の提案や景観エリアマネジメント講座などいくつもの事業を開始した。その

活動は、NPO 法人設立へと発展し、現在では京都市と連携して景観づくりに取り組む団体として認証されるまでに至っている。また横浜市では、未来志向で対話し、参加者の関係性を作り上げながら、創発されたアイデアに従って協調的行動を起こしていく取組「フューチャーセンター」を活用したまちづくりを始めている。市民や NPO、企業や大学関係者等様々な主体が一緒になって、郊外住宅地とコミュニティのあり方について対話した結果、既存の住宅地をまち単位で捉え、官民協働で再生していくという画期的な取組の協定が締結されている。

対話の場を通じて、市民が共助で担うことができるまちづくりの範囲は近い将来ますます広がっていくことが期待される。今後は、行政施策に市民力が効果的に連動していく仕組みの実現を目指し、市民と行政の協働関係を深化していく必要であると考えられる。

6 市民と行政の協働関係を深化していくための提言

(1) 行政職員が一市民の立場でしゃべり場に参加する

一つ目の提言は、やはり行政職員のしゃべり場への参加である。行政職員が考える市民像といえば、どうしても苦情や要望を述べる存在となりがちだが、それは市民全体の一部の存在であり、現在のしゃべり場では、行政への要望を述べる市民は稀である。実際にしゃべり場に参加した職員からも「しゃべり場で知り合っていたおかげで、後日業務の関連で相談に行ったときもすぐに打ち解けることができた」と、市民との関係向上に手ごたえを感じる回答を得ることができた。また、前出の京都市未来まちづくり 100 人委員会においても、前向きで主体的な市民に出会うことで「一緒に何かできるのでは」と気づき、職員が区役所に異動後、市民との新たな取組を始めたり、市民活動へ参加するなど、意識に変化が生じているという。

しゃべり場へ参加することで、市内のまちづくりのキーパーソンとのつながりを得ることができる。また、しゃべり場での市民のつぶやきと担当業務とを組み合わせることで、これまでにない横断的な政策の立案につながることも考えられる。行政職員限定のしゃべり場を開催する等対話の場の楽しさを体感する取組を行いながら、職員のしゃべり場への参加を促し、これからのまちづくりに適応した、柔軟な思考と多様なつながりを有する職員を増やしていく必要があるのではないかと考える。

(2) 市民の調査力・情報力を養う

市民活動を進めていくためには、市民の気づきを引き出し、共感を広めるための情報をいかに集め、整理し、伝達できるかが求められる。市民目線に立った調査の心得やアンケート・ヒアリング等の手法について、市民が学ぶことができる研修の機会を設けることで、市民力の向上を図りたい。その結果、しゃべり場で生まれた一つのアイデアが、一歩進んだ説得力のある事業提案へと進化することができ、行政との建設的な対話の実現につながると考える。

(3) 市民と行政による事業立案の合議の場を作る

複雑化する市民ニーズに対し効果的に対応していくためには、市民も行政も固定的な役割にとらわれるのではなく、市民からの提案を行政が共感し事業化したり、行政からの依頼に応じて市民が事業実施を担っていくといった、持ちつ持たれつに基づいた合意形成の場が必

要であると考えます。

愛知県豊田市では、協働担当部署である地域支援課の立会いの下で、市民活動団体が協働を想定する担当部署と意見交換する場を設け、お互いの立場や考えの相互理解を深めた上で事業提案を行うことができる制度の立ち上げを検討しているという。平成 26 年度の試行事業では、市民活動団体と障がい福祉課・防災対策課が意見交換を行った結果、言葉による意思疎通が難しい市民が避難所に訪れた際の意思疎通の方法として、コミュニケーション支援ボードを整備するという提案がなされ、現在予算化が進められている。また福岡県宗像市が行っている、市民活動団体等がノウハウ等を活かして企画提案し委託を担う「市民サービス協働化提案制度」では、担当部署のコミュニティ・協働推進課が事前相談の場を設け、市民活動団体の活動のどの部分が市民サービスとして提案できるのか等の質問に応じるとともに、必要に応じて関係部署とつなぎ協議するコーディネートをを行っている。

対話や交流を通じて市民と行政の信頼関係を構築しながら、行政の事業のあり方を見直し、市民の自発性に応じた公共的サービスの供給方法を協議していく必要があるのではないかと考えます。

7 おわりに

これからの時代のまちの豊かさとは、どれだけ多くの市民がまちとつながり、市民と行政が持ちつ持たれつの関係で支えあい、その成果を市民全体で分かち合える状態にあるかだと考える。現状では未だ行政にやってほしいことのみを主張し、合意形成や役割分担について対話の場につくことが難しい市民も存在する。しかし、主体的に行動しまちづくりに汗を流す市民も確実に増えてきている。一人でも多くの市民が、わがまちのために楽しみながら行動を起こすことができるよう、対話の場づくりの在り方について今後も考え、私自身も行動していきたい。

最後に、本研究をご指導くださった日本大学教授・地域リーダー養成塾主任講師の沼尾波子先生、地域リーダー養成塾の関係者の皆様、第 26 期沼尾ゼミの同志、そして地域リーダー養成塾へ快く送り出し、多くのご協力を頂いた刈谷市役所の皆様に心からお礼申し上げます。

【参考文献】

- ・ 伊藤 雅春・原田 和成 (2011)「市民参加手法の比較検討 ―まちづくりワークショップ、市民討議会 (プラーヌクスツェレ)、ワールド・カフェの事例を対象として―」コミュニティ政策研究第 13 号
- ・ 香取 一昭・大川 恒 (2011)『ホールシステム・アプローチ』日本経済新聞出版社
- ・ 京都市ホームページ「京都市未来まちづくり 100 人委員会～座談会～ (第 76 回おむすびミーティング)」 <http://www.city.kyoto.lg.jp/>
- ・ 高原 稔 (2007)『市民シンクタンクのすすめ』日本地域社会研究所
- ・ 野村 恭彦 (2012)『フューチャーセンターをつくろう』プレジデント社
- ・ 宗像市ホームページ「市民サービス協働化提案制度」 <http://www.city.munakata.lg.jp/>
- ・ 山崎 亮 (2012)『コミュニティデザインの時代』中央公論新社
- ・ 吉村 輝彦・井原 祥子 (2013)「たかはま ざっくばらんなカフェ」の実践に見る対話や交流の場づくりの意義と可能性」日本福祉大学社会福祉論集第 129 号

わがまちのしゃべり場・これまでの歩み

回数	第1回	第2回
日時	平成20年6月1日(日) 午後1時～午後4時30分	平成21年11月1日(日) 午後1時～午後4時
開催場所	刈谷市役所 大会議室	刈谷市役所 大会議室
参加者数	98人	93人
手法	分科会形式によるワークショップ	ワールド・カフェ方式
企画の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 5つの分科会に分かれ、2つのテーマで語り合う。 テーマ1: まちの困りごと・問題・課題は? あるべき理想像とは? テーマ2: 改善するために、何が必要か? 私たちに何ができるか? ■ 各分科会での意見を発表 ■ 分科会代表者等とでパネルディスカッション 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 事前に設定された13のテーマのテーブルに分かれ、おしゃべりカフェと称した語り合いを行う。 ■ おしゃべりカフェは全部で3ラウンド行い、参加者はラウンドごとに自由にテーブルを移動して語り合う。 ■ おしゃべりカフェ終了後テーブルを自由に見学し、共感したアイデアにシールを貼る。 ■ 全体共有を行った後、自分ができる小さなはじめの一步を考え、参加者同士で交換する。
主なおしゃべりテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域 ● 子育て ● 環境 ● 福祉 ● 安心・安全 	<ul style="list-style-type: none"> ● 刈谷の南北の交流、どう進める? ● 町内会が元気になるために ● 未来に元気な商店街 ● 誰もが集える場所づくり ● 『刈谷 LOVE』増量大作戦
当日の成果	<p>「しゃべり場のような、気持ちの交流の場が必要」「自分から声をかけ、相手を受け止めるという行為が市内の至るところで生まれ、交流が育まれれば、地域の課題にも協力して取り組むことができる」ことが共有された。</p> <p>当日は当事者意識の高い人たちが多く集まり、熱気あふれる場となった一方行政に対して要望を言う者や意見を言っても何もならないと発言する者もみられた。</p>	<p>「笑顔で人に話しかける」「地区の研修会で今日のような場を作る」「刈谷のいいところを一つずつ見つける」などの行動宣言が挙げられた。</p> <p>「井戸端会議に近い感じで話しやすい」「普段の関心と異なるテーマを選ぶことで新たな気づきが生まれた」「テーブルの落書きを見るのが楽しい」などの好意的な評価を受け、以後のしゃべり場のスタイルがゆるやかに確立されていくこととなった。</p>
開催後の動き	市民グループ「刈谷のまちをよくし隊」が結成された。	市民と行政の意見交換会「協働のまつり場」の誕生の契機となった。

わがまちのしゃべり場・これまでの歩み

回数	第 3 回	第 4 回
日時	平成 23 年 1 月 23 日 (日) 午前 10 時～午後 4 時	平成 24 年 1 月 29 日 (日) 午前 10 時 30 分～午後 4 時
開催場所	刈谷市総合文化センター	刈谷市総合文化センター
参加者数	91 人	70 人
手法	ワールド・カフェ方式	ワールド・カフェ方式
企画の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 午前・午後と一日に渡り開催。 ■ 午前はつながりインタビューと題し、3 人 1 組のグループになって、ふとしたまちの変化等を語り合う。その後、午後のおしゃべりカフェで語り合いたい内容を書き出す。 ■ 午後は、前出の語りたい内容を元にして決めた 16 のテーマについて、2 回のおしゃべりカフェを開催した。 ■ 最後に全体で共有を行い、未来の刈谷への想いを書き記した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 午前・午後と一日に渡り開催。新しい自分が未来志向で考えることをコンセプトに企画構成。 ■ 午前は相互インタビューで相手の魅力や長所、特技等を引き出し合うワークを実施した。 ■ 午後は「今の刈谷」「20 年後の刈谷の理想像」「20 年後の刈谷のためにやってみたい事」をテーマに 3 回のおしゃべりカフェを開催。 ■ 最後に全体で参加者から寄せられたアイデアを共有した。
主なおしゃべりテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ● アートをまちに開く!? ● 便利なまち 心地よいまち ● 老後の不安 老後の希望 ● おしゃべりで楽しいワクワクの素を探ろう! 	<ul style="list-style-type: none"> ● 全てのテーブルで共通テーマの語り合い ①いまの刈谷について ②20 年後の刈谷について ③20 年後のステキな刈谷のために、『こんなことやってみたい! できたらいいな!』と思うこと
当日の成果	「つながりができ、視野が広がった」「多様な人が参加できる場、しゃべれる場があることが大事」「敷居の高いイメージを持っていたけど、気楽に意見を聞いてもらえてとてもよかった」などの感想から、いろいろな立場の人が出会え、想いをゆったりと語り合い、共感できる場として機能する大切さが見えてきた。	参加者から「障害のある人もない人も一緒にファッションショーがやりたい」「市民の誓いに笑顔でいることを入れたい」など、いくつかの具体的なアイデアが挙げられた。 いろいろな意見に触発され、自分の意見が充実した変化を遂げたという声が聞かれるなど、行動に結びつく流れが感じられる場となった。
開催後の動き	振り返りの語らいの場である「芽吹きをつどい」を開催。行動宣言を行う人に共感したり、イベント参加におけるマッチングが生まれたりと、ゆるやかな動きが見える化された。	前回に引き続き「芽吹きをつどい」を開催。具体的なアイデアの実現に向けて、グループに分かれてアイデアを深め、複数のプロジェクトが動き出した。

わがまちのしゃべり場・これまでの歩み

回数	第 5 回	第 6 回
日時	平成 25 年 1 月 29 日 (日) 午後 1 時～午後 4 時 30 分	平成 26 年 1 月 25 日 (土) 午後 1 時～午後 5 時
開催場所	刈谷市民ボランティア活動センター	刈谷市民ボランティア活動センター
参加者数	70 人	62 人
手法	オープンスペース・ミーティング (OST)	OST+ワールド・カフェ方式
企画の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ■ ゲストスピーチ「まちのステキを掘り起こす！長良川おんぱくの取組」(蒲勇介氏：長良川温泉泊覧会実行委員会事務局長)を初めて開催した。 ■ その後参加者自ら自由にテーマを提示する機会を 2 回設け、各テーブルでおしゃべりセッションを行った。 ■ 1 回目は 11 テーマが、2 回目は 7 テーマが提案された。 ■ 共有の時間は特に設けず、フリータイムで各自自由に交流した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ゲストスピーチ「身近な農で育む。耕す楽しみ、広がるつながり」(熊谷正道氏：NPO 法人日進野菜塾代表理事)を開催した。 ■ その後事前に参加者によって提案された 14 のテーマに分かれ、3 回のおしゃべりカフェを行った。 ■ 終了後、全体で各テーブルの気づきを共有し、参加者一人ひとりの気づきをメッセージカードに見える化した。
主なおしゃべりテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ● 心・体の健康な老後を考えよう ● 身の回りにあるもので不用になったものを、楽しみながらリサイクルして東北支援 ● かりやのおいし～いスイーツ教えて！ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢化を支え合う仕組み ● 刈谷でにぎわいを創ろう ● あなたの子育て 私の子育て ● 就活？！ ● 気になる自転車マナー
当日の成果	今回はアイデアを熟成する場である「芽吹きをつどい」は開催されなかったものの、前回のしゃべり場で生まれたプロジェクトグループがおしゃべりセッションでテーマを提案し、新たな出会いや気づきを得ることができた。	出会いの機会となり、多様な考えに触れることができたという内容のほか、複数の参加者から、刈谷のまちをよくしていくために、少しでも何か行動を起こすことができればとの思いを確認することができた。
開催後の動き	企画メンバーによる振り返りの場において、新しい層の巻き込みを期待して、市中央部以外での開催を検討してみてもという意見が出た。	次年度の開催に向けて話し合うなかで、従来のしゃべり場に加え、地域版のミニしゃべり場を開催することで、対話の場を広げていきたいという方向性が話し合われた。